

た日比谷は、すこし手をゆるめると、今度は頬をぶにんと指で押さえつけた。

「あら、やあね。なんかあんだ、もち肌になってない？」

「やめろって、もう！」

口がタコのように尖り、珍妙な顔になる真幸の姿に、さきほどからちらちらうかがってきていた女性が「ぶっ」と噴きだす。「笑われたじゃないか」とわめいた真幸は、背後から妙に鋭い視線を感じてぞくりとする。

(え……?)

振り返ると、そこには意外な男の姿があった。

「な、直隆さん!? なんで? 仕事じゃないの」

あわてて日比谷の手を振りほどき、真幸は立ちあがる。なんだか怒った顔をした彼は、「真幸こそ」と低い声でつぶやいた。

「どうして、そんなにあわててるんだ」

「いや、驚いたからで……って、え?」

店内の照明は薄暗く、長身の直隆の陰にいる人物が、真幸には見えていなかった。

だから、外国製の強い香水のにおいが鼻をくすぐってはじめて、彼が誰かを同伴していることに気づかされた。

長い髪、赤く塗った唇、曲線をうつくしく見せるための、やわらかい素材の服。

「直隆さん、おともだち？」

あまつたるい、そしてすこし冷ややかな女の声。完璧に整えたネイルで飾られたその手は、当然のように直隆の腕に添えられている。

「ねえ、ご紹介していただけないの？」

我がもの顔、というのはこういう顔かと、真幸は遠い意識で思う。高級そうな香水をまとう、高級そうな服を着た女は、これ見よがしに直隆の腕を数センチ、指先で撫でた。

軽く胸を押しつける程度の密着感に、真幸は凍りついた。同時に、べつに働かなくてもいいカンが、ここで働いてしまった。

あ、こいつら、やったことある。

「……同居人の名執真幸だ」

しぶしぶ、といった体で直隆が告げた。そして「彼女は」と続けようとするより早く、にっこりと女は笑う。

「はじめまして、岡部真理子です」

彼女が名乗った瞬間、どこかで聞いた名前だと思った。真幸は戸惑いながら直隆を見つめ、そしてはっと気づいた。

——マリコとのデートで高級フレンチだのイタリアンだのに連れていかされたが……。
(つて、それ、マエカノじゃん。つか、婚約してた女じゃん！)



が、と頭を殴られた気がした。

恋人から、ただの同居人と言われたことについてなのか、かつての婚約者を腕に絡ませている男が、仕事と嘘をついたことに対してなのか、真幸には判断がつかなかった。

そして心の隅で、こう思っている自分がいるのもまた、否めなかった。

ああ、やっぱり。

「あのう、こちらのかたは？」

真理子が、ちらちらそわそわと日比谷を横目にうかがう。

洒落たスーツに時計、ネクタイ。どれをとつても高そうなイケメンを見逃さない鋭さは、上品そうに見えても彼女が猛禽類であることを表していた。真幸は一瞬ためらったのだが、なぜかひどく不機嫌そうに、直隆がうながしてきた。

「真幸、どなたか紹介していただいてもいいか」

「え、ああ……えっと」

真幸が紹介してもいいかと確認するより早く日比谷は立ちあがった。

「はじめまして、日比谷と申します」

名刺をとりだすと営業用の完璧な笑顔を作る。むろん、オネエ言葉も封印だ。彼の肩書きを見たたん、真理子がぎらっと目を輝かせた。

「えっ、マスコミのかたなの？ すごーい」

「下請けの制作会社なんですけどね。一応、『ハチブン!』とかの制作も手がけてます」

「東テレの!? わたしいつも見てます!」

ゴールデンタイムに放送されている、情報系エンタメ番組のタイトルを口にしたらたん、真理子のまばたきが激しくなった。「ありがとございます」と軽く頭をさげる日比谷のまばゆいばかりのイケメンスマイルを見て、真幸は内心、うわあ、となった。

(日比谷、すげーむかついてる……)

ゲイだからといって誰もが女ざらいというわけではないが、日比谷はこういうタイプの女がものすごくきらいだ。そして異常なまでに愛想がよくなる。本人曰く、「いやな相手にいやな態度をとって、あとからあれこれ言われるのはもつといやだ」そうだが、おかげでよいいな秋波を飛ばされ、迷惑することも多い。

案の定、あれこれと話しかけられている状態で、助け船をだすべきか否かと迷っているうちに、直隆の冷やかな声がした。

「真理子。いいかげん迷惑だろう。こちら、打ちあわせ中のようだし」

「あつ、そうね。ごめんなさい。それじゃ」

たしなめられ、肩をすくめるポーズがわざとらしいと感じるのは性格が悪いだろうか。

ふたりの去っていく背中を眺めてぼんやりしていると、彼らにくるりと背を向け、椅子に座った日比谷が吐き捨てるように「うえっ」と言った。

「なによあの女、きもつ。若ぶってるけどアラサーじゃないのよ、ぶりっこすんなっつ」
「……聞こえるぞ」

「知ったことじゃないわよ。っていうかあんたもあんたよ、なにやってんの」

日比谷が顎をしゃくったさき、直隆が真理子（まこと）を連れて席につく姿が見えた。

「直隆ってあれ、あんたのダーリンじゃないの。なにが仕事よ、女連れてさ」

「し……仕事かも、しれないじゃん」

「でたよ、真幸のよくないよかった探し。目のまえの現実見たらどうなの」

「見てるよ。だから取り乱してもいいいだろ」

真幸は、すっかり氷の溶けたアイスコーヒーをすすった。ぬるいうえに薄くなったそれは最悪な味がする。

日比谷が「はあーっ」とこれ見よがしにため息をつき、がりがりと頭を掻いた。

「あのさあ、冷静なのと斜にかまえて冷めたふりするのは違うって、何度も言ってるでしょ」

「べつに俺は……」

「ふつうに動揺しなさいよ。かわいげない。平気平気って顔してっから、表面だけ見て寄ってきた男とはうまくいかなかったんでしようが。……いろいろ、覚えはあるけど」

真幸は口を引き結び、目を伏せた。日比谷はふたたび「はあーっ」と息を吐き、強情な友人のままで頬杖をつく。

「あのね、軽くて遊んでる、さばけたタイプっぽく見せたいのかもしれないけどね、そうやってスレたふりしても、じっさいのあんたは一途だし傷つきやすいのよ。ついでに、愛が重い。さっきの女と彼氏がいっしょにいるとこ見つけた瞬間、どんな顔したか自覚ないでしょ」

「……どんな顔したってんだよ」

「無表情でさ。すんごい冷めたっぽく見えるけど、裏切られたってショックで目えぎらつきらして。あーやばい、こいつ刺すかもって顔してた」

言いたい放題の友人の言葉はショックでもあったが、真幸はなにも言い返せなかった。自分でも、凶星だとわかっているからだ。

「とにかく、きょう帰ったら問いただしなさいよ、アレ」

行儀悪く親指でさす彼に、ぎくしゃくとうなずく。

「……ほんとにできんのかね」

ぼやいた日比谷の言葉は、真幸の内心の不安、そのものだった。

* * *

数時間後、日比谷にさんざん発破はっぱをかけられた真幸が家に戻ると、直隆はもう帰宅していた。リビングにあるソファに座り、ノートマシンを膝に抱えて仕事をしている。